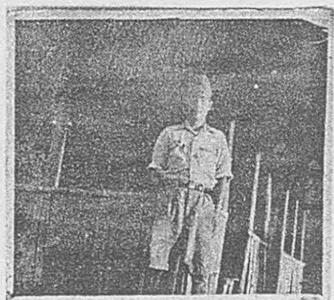




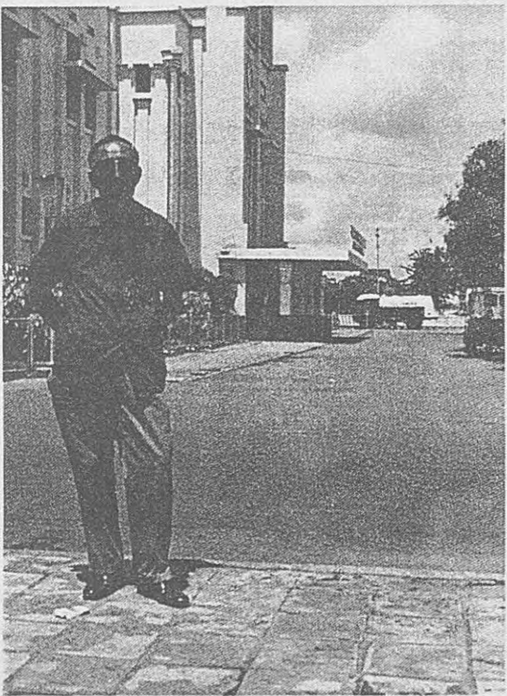
於、台北陸軍病院東門分院
左三國繁丸君。(1942年(昭和
17)



在、ハヤツノ仮設陸軍病院
出科室 待合所前。(1946年
(昭和21) 中川兵長(出科室)
写す



於、台北陸軍病院東門
分院 (1942年(昭和17)



• OCT • 73 15

元バレンバン軍政部建物前にて
人物は日本名板垣、現地(華化)名サニ一氏
(1973年(昭和48)南方旅行の際写す)

夢の南方軍政時代を生きと

△補追▽ 終戦への歷程

GB554
1846



915

コクヨ ケー70 20×20

84W43238

夢の南方軍政時代を生きとて

△補遺△終戦への歷程

はしがき

「大東亜学園を確立して世界新秩序の建設を期す
し——これに、わが國が國運を賭けて戦ったさきの太平洋
戦争（当時の大東亜戦争と呼ばれ、五四—一九四五）当時の國策
大綱の大前提であった。
然し結果的には敗戦による終局を迎えてこの目的は泡沫

2
(うたがた)の如く清き去り、また、この戦争に対する批判も、さう論議されつつある中に、今や遠ざかり行く歴史のひとコマとしてその記憶もようやく薄らぐところをいふ。

たがし、昭和二十一年(一九四二)一月八日の日米開戦の初期から中期にかけて破竹の勢をもつて南方(東南アジア)のほぼ全域を席捲・制圧し、冒頭の理想も着々、成功するかに思われた一時期があった。

即ち、当時の南方攻略地域の総面積は約三〇〇万平方料、人口実上一億二千万を算したこの広大な地域に、我が国が、少くも軍路を極行しようとした。

例らば、露所に於ては昭和二十七年(一九五二)三月五日首都バンビア占領、同月十九日蘭所の無条件降伏と同時に日本は軍政を布告しようとした。

これら大本営政府連絡会議において、式に曰く占領地は「実施計画」が決定された後、同年一月二〇日のことである。(公武戦争記録による)

それによれば、その実施要領の「第一」の方針の項に次の通り唱えられている。

即ち「占領地に対し一差一当り軍政を実施し、治世の恢復、重要な国防資源の急速獲得及び派駐軍の自活確保に資す。

すしと。

4
更に参事官に就きし、「陸海軍の軍政担任区分」の項では次のように協定せらる。

一 陸軍主担区域

香港、比島、英領馬來、スツトラ、ジャワ、英

領オランダ

二 海軍主担区域

蘭領オランダ、セレベス、モルッカ群島、小スンダ列

島、ニューギニア、ビスマルク諸島、カラム島

右のような決定に伴ない、特め有能な文官及び民間

人が多数司官あるは軍属として渡航しよに参事といふ
たのもあるが、私はこの時既に多くの曲折を経て再渡南を
果たし、現地軍政に關するをいた。

落下傘部隊降下の地として知らしめるバレンピン軍政新案
員として約二の年を、戦前一年の南方体験と、その間は時
得しと現地語を最大限に活用して作戦遂行のための軍
の協力に青春のエネルギーを燃やし続けしを、あるが一期一会
と感ずるこの間の体験を記述しよるものが本書目である。

5
思えば、南戦から艦上ばかり四三年の歲月が流し、終
戦を契機として國民は隆盛の苦一ケわらう起るより、今

6
日一人あり國民総生産（GNP）も自由世界第二位の経済
大國と生れ変わったものがある。戦争と知らず、戦後世
代が國民の半数を大きく超えた現在、この際一たび反省を
含め戦時中の苦難を思ひ返すことも意義深いこととな
いと思ふのである。

文中に見られるように勝利を重んじ、戦争初期に
けしきの奮りのようなものも無しとなりながら、また、終局の勝
利を信じて頑張った時々のわんわんのひたすらな心も
また真摯且つ切実なものがあつたものがある。
そしてわが國の現代史は多岐のスペアを削るであらう

コクニ ケー70 20x70

太平洋戦争の一面面であつたその軍政時代を偲ぶとき、今更
のようには深い感慨がよきよきのも故なしとなりつつある。
意足たぬこの回想記が大方の人には胸息をたげることば
幸甚永に道なきものはない。

昭和五九年（一九八四）八月二十五日

丹田 政吉

晩夏七三歳誕生の日

夢の南方軍政時代を生きとて

《補遺》終戦への歷程

目次

はしがき

第一章 宿命の最渡南

1	軍事機密書翰を受け取る	21
2	輸送船出航す	25
3	敵魚雷攻撃の洗礼	31
4	板切ル一枚で南西諸島の海に漂う	35

第二章

- 5 苦痛に耐えた艦上チカ一の余時間 41
 - 1 台北陸軍病院赤門分院入院生活 47
 - 2 一〇余名の重傷者、最初基隆分院に着く
キールン
 - 3 全身の爆傷 50
 - 4 フィロン派遣軍軍司令官の鬼舞い
明と暗 55
 - 5 戦傷痍兵士たちの野球試合 62
 - 6 高雄港から再上陸 66
- 第三章
- 1 第二章のふりかえりとパレンバン到着
鼻頭に憲兵少尉殺しの出迎え 73

第四章

- 2 宿舎は将校用と級旅館 78
 - 3 先着直渡南者たちの動静 81
- 初期の軍政部
- 1 軍政部入り 85
 - 2 落下傘部隊残留将校の作戦説明会 89
 - 3 通訳実利 94

第五章

- 1 敵性国男女各抑留所について 98
- 2 婦女子抑留所の内部 106
- 3 戦前から知りた同男子抑留所、
抑留所長の温情 115

第五十章

4	敗者哀れー元オーストリア学校長ファン・テイルタースの死	119
	軍政部日々	
1	漸く整った部内の陣容	123
2	森下龍一警務部長の描類	128
3	軍政職務の流れの中	130
4	『DINANTAN』(バンタン)のルペルト姉妹と山本祖國解放の願望	135
5	部長と酋長ー酋長の表敬訪問	140
6	長官と酋長ー酋長の歓迎風景	145

第七章

7	長官のバルパラム地方視察に随行して	155
	当時の現地生活と環境	
1	パレンバン市鳥瞰	169
2	戦時下の日常生活の中で	176
3	州内実業界の動き	181
4	身近かに起きた恋愛騒動	188
5	外人ホテルを連立して「ムシ」の舟行	198
	州立タバコ専売公社創立	
1	現地タバコ事情	207
2	設立の五日目	210

第八章

第九章

3	理事・監査役拝命	214
1	日本語普及と並見て 中央警察署内に「夜間日本語教室」 開設	217
2	軍政部講堂に「夜間日本語学校」 開設	222
	高松宮殿下台臨遊ばさる	
1	大象牙王長官より献上	228
2	今も手元に残る象牙の印鑑 州参議員制度整定	233

第十三章

1	現地人の政治への参加とその動向	236
2	一立候補者の演説を聞いて	240
3	州議会公審議に立ち上る	244
	印度独立の志士スバス・チャンドラ・ボス 氏の面影	249
	「ス」工作事件	
1	事件の肉容と発端	258
2	情報将校飯島さんといふ人	263
3	判決の法廷に、裁判長と居並んで	275
4	長官が感謝状と七島他州旅行の原案書	280

第十四章

5 事件その後 287

1 日・イ・オの三字典「官庁用語集」の編纂

1 上村と警務部長から薦められ

2 出来上がった字典の手引き 296

第十五章

1 志し得ぬ人ひと (放竹略) 301

1 鈴木禎次郎 (判事・元ルパン高軍法隊長)

2 竹谷 新 (阪大文学士・元陸軍一等兵 軍政部出向) 306

3 秋山蒼三郎 (元陸軍報道班員 軍手係 軍政部宣伝課文化科長) 315

4 黒須 勝 (再渡南者 元推賞商・上昭和社長) 320

第十六章

住民銃動動態勢に入る

1 民意発揚を訴える州内を長官・部長と廻す 326

2 「将校錬成学校」開設と「女子挺身隊」の結成 331

第十七章

戦況不利に傾く

1 住民海外短波放送受信禁止の緊急措置 336

2 置令

2 加ル力ナル島撤退の情報暗に伝ふ

3 パレンン表油所に米軍機の初空襲

4 陸軍最後の現役兵と現地入隊 343

第八章

回顧片々

- 1 現地人政庁職員の軍政協力の実態 347
- 2 夢の南方軍政時代を生きとて 351

△補遺▽ 終戦への歷程

- (1) 亡きとて兵隊といふ 358
- (2) 新兵教育の常套手段 363
- (3) 洞窟病院出現と切込挺身隊の結成 366
- (4) 家族の一員であった陸軍航空大尉の戦死 370
- (5) 終戦の詔勅と揮とて 377
- (6) 終戦直後への部隊内動静 379
- (7) 新設抑留所

あとがき

- (8) 趣味による救済への穿ち目の移動 385
- (9) 「読後焼却」に至る書簡を受けとる 393
- (10) 糧秣班のトラウマを脱却する 396
- (11) 再度の抑留所移動と極限下の人間関係 399
- (12) 武蔵の海上投棄 402
- (13) 平和の尊さ 404
- (14) 復讐は夢枕とて 406

資料名：夢の南方軍政時代を生きとて：補遺・終戦への歷程 12ページ
著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。国立国会図書館 2023/6/29